

## エレン・G・ホワイトの苦悩と決意の手紙

1891年の終わり（→11月12日、この時、62歳で、夫のジェームス・ホワイトは1881年8月6日に死去している）に、エレン・G・ホワイトは、世界総会の（悪意ある：谷口）要請にこたえて、オーストラリアで新しく始められた仕事をサポートするために、オーストラリアで九年間（→この間に、「キリストへの道」「祝福の山」「各時代の希望」「キリストの実物教訓」を出版、1900年8月アメリカに帰国する）も生活することになりました。しかし、到着して間もなく、苦痛の多い長引く病気にかかってしまうのです。その時に書いた手紙が残されています。

\*\*\*\*\*

「どの手紙も、一ページから二〇〇ページにわたって、私が書いたもので、そのほとんど全部が、枕を使ってベッドによりかかり、半分横になり半分座ってか、または、あまり気持ちの良くないいすに座って、元気を出しながら書いたものです。座ることは、私の腰と背骨の下部に、非常な苦痛を与えます・・・正しく座って、頭をあげていることは、とても疲れます。私はいすの背に枕を置いて休み、半分よりかかっていなければなりません。これが現在の私の状態です。

しかし私は少しも失望してはいません。私は毎日支えられているのを感じます。退屈するような夜の長い間、多くの時を祈りに用いました。すべての神経が苦痛のために叫んでいるように思われる時、キリストの平和が私の心にあふれてきて、私は感謝と賛美に満たされるのです。私はイエス様が私を愛してくださることを知っています。そして私もイエス様を愛しています。ある時は三時間しか眠りませんでした。しかしこの長い夜の暗闇の中で、私の周囲は輝き、神様との交りを楽しんだのです。

はじめに私がどうすることもできない状態になった時、広い海を越えて来たことを深く後悔しました。なぜアメリカにいなかったのだろう。なぜこんな犠牲を払ってこの国に来たのだろう。何回も何回も私はベッドの掛ぶとんに顔を埋めて、思う存分泣きました。しかしいつまでも涙にくれてばかりはいませんでした。私は自分に言いました。

『エレン・G・ホワイト、あなたは何を考えているのですか。あなたが行くのが最善だと教会が判断したところに行くことが自分の義務と思ったから、オーストラリアに来たのではありませんか？それがあなたがいつもしてきたことではありませんか』『はい』と私は答えました。『それならあなたがほとんど見捨てられたと思い、失望を感じるのはなぜですか。それは敵のしわざではありませんか』『そうです。そう思います』と私は言いました。私はすぐに涙をふいて、『もう十分です、もう物事の暗い面は見ません。生きるも死ぬも、私のために死んでくださった方に魂をお任せします』としました。

私は主がすべてを良くしてくださることを信じ、どうすることもできない八か月の間、気落ちすることも疑うこともなく過ごしました。今はこのことをこの国の信者のためにも、アメリカの信者のためにも、私のためにも、主の大きな計画の一部と見るできるようになりました。その理由も、どうなるのかも、説明はできませんが私はそう信じています。そして私は苦しみの中にあっても幸いです。私は天の父なる神に頼ることができます。その愛を疑いません。日夜見守ってくださる保護者があり、私は主を賛美します。心に感謝があふれるので、唇は主を賛美するのです。」

参考：「セレクトッド・メッセージズ」エレン・G・ホワイト 著 二巻 P.242  
「エレン・ホワイト」～その生涯とメッセージ～ 山形正男 著